知事賞

あまい水

不二聖心女子学院中学校

二年　小池（こいけ）　さん

私の思い浮かべる水辺には、いつもホタルが飛んでいる。我が家の庭に湧水が流れており、毎年初夏になるとゲンジボタルがチロチロ飛ぶ。それを眺めるのが私の夏の風物詩である。

だから私にとってホタルは、身近な生き物だった。幼い頃はどこの川にもホタルがいるものと思っていたから、「ホタルはきれいな水にしか住めないんだよ。汚い水にはまずいまずいって言って寄りつかない。だからうちの水はきれいなんだね。」と、祖母に言われたときは驚いたものだ。そして同時に、誇らしくも思った。それまで当たり前に見てきたホタルと水が宝物のように思えてきた。

この宝物を守らねばという使命感を心に宿した幼い私は、その年のカワニナ撒きをする祖母と兄についていった。カワニナはホタルの幼虫の餌となる水巻貝で、ホタルが元気に育つように、庭の小川に少しずつ足していくのだ。まず祖母が、プラスチックの容器からカワニナを出し、小川の上からばらばらと撒く。次に兄がぼとぼとと水に落とす。順番を待つ私は、この神聖な儀式に、肺が縮むほど緊張していた。ついにカワニナを渡された私は、焦って容器ごと小川の中へ放り投げてしまった。ぼちゃん、と大きな音が鳴り、祖母は笑い、兄は呆れながら容器を拾いに行き、私は自分の立てた水音にびっくり

して泣いた。私の水辺での思い出の一つだ。その年もホタルはたくさん飛んだ。

祖母が亡くなって初めての夏、私はカワニナを撒き忘れた。カワニナ撒きは祖母が中心になって行っていたものなので、法事やら何やらがやっと落ち着いた頃には、ホタルの幼虫の季節を過ぎてしまっていたのだ。もうそれなりに大きくなっていた私は、ホタルがもういなくなっているかもしれないと不安に感じつつ、夜の小川まで下りていった。着いた先は真っ暗だった。ホタルの光は一つもない。なんだか怖くなって、手を叩いてホタルを呼んでみた。すると視界の端がチカチカする。その方を見る。やっぱりホタルだった。夢中で手を叩く。叩く度に光が増える。増えていく度に安心した。昔から変わらずに流れるきれいな水が、私が忘れてしまっていた間もホタルたちを守ってくれたのだと思った。

「来い、来い、ホータル来い。こっちの水はあーまいぞ。あっちの水はにーがいぞ。」そう歌って、祖母と一緒にホタルを呼んだこともある。そしてホタルそのものだけでなく、ホタルをめぐる様々な思い出が私の宝物となっていることに気づいた。あまくきれいな水が、私のその宝物を守ってくれたように、私もこの水をずっと変わらず守っていこうと思った。

しかし全国的にみると、ホタルなどの水生生物は年々数を減らしているらしい。これは、河川の汚れ、特に中性洗剤による汚物の沈殿や、農薬や化学肥料の使用により、水が汚れたり餌が減少したりしたことが原因だそうだ。私は美しい水と一緒に、そこに生きていた生き物や風景、そこに住む人々の思い出もなくなってしまったら悲しいと思った。そして、これらをこの先も守っていくためにはどうしたらよいかを考えた。考えた結果、まずは身近にある川の清掃活動に参加することにした。行動を起こすにあたって、世界中の水をきれいにする、だとまだ私には広すぎてピンとこない。けれど、近所の川のごみを拾う、であれば、問題を具体的なものとして肌で感じられるからだ。もちろん、日々の生活の中でも水を汚さずに節水などを心がけていく。

私はホタルや小川が昔と変わらずにあることが嬉しいし、安心する。人は水と共に生きてきた。海や川の思い出を持つ人も多くいるだろう。皆がその思い出を安心して大切にできるよう、私は水をこれからも守っていきたい。